

建設技術者の輝く未来を願って

建設技術者の責務は以前にも増して重要になっていることに、国や自治体の建設技術者を始め、民間技術者も等しく再認識する必要がある。平成17年度から施行された「公共工事の品質確保の促進に関する法律」（「品確法」と称す）は、基本的に発注者側技術者の技術力の向上を目指すものであるから、公共工事発注機関である国や自治体の建設技術者の責任が飛躍的に増大するとともに、施工を実施する民間企業の建設技術者のスキルの信頼性が一層求められることになったものである。

基本的に公共工事は50年、100年先の安全安心を確保しうる社会基盤を築くものであるから、建設技術者は時代の動向を敏感に察知したうえで、先見性を持って技術導入していく使命を有している。21世紀は環境の時代と言われるように、前世紀の負の遺産を修復改善して来世紀への生き残りを地球規模で図らねばならなくなっており、低炭素社会と循環型社会、自然共生社会の構築に向けて環境保全型建設技術が求められている。

品確法では、発注者が建設工事の品質確保の促進に努めねばならないとしているように、現状では建設業全体の成果であるべき社会基盤が、総合的に品質や価格の点で優れているという保証と自信が揺らいでいることを率直に認めねばならない。建設産業政策大綱にもある「エンドユーザーのために良いものを安く」の「良いもの」が強調され

るべきところが、「安さ」の方が過度に強調されて、建設工事の落札率が一人歩きし、建設業の競争環境に著しい荒廃を招来している。このような世界では、本来あるべき技術者倫理の貫徹は望むべくもないであろう。総合評価制度の本格導入によって軌道修正が図られてきつつあるが、この点でも発注者側技術者の力量が真に問われることになるであろう。品確法への適正な対応によって、後世に誇りうる優良な社会基盤を作るという使命を果たし、本来の適正な競争環境において建設事業の達成感を獲得することが大切であり、またこれを可能にするものこそが技術開発であろう。

平成13年度から開始された「公共工事における新技術活用促進システム（NETIS）」は玉石混交のシステムであったが、より有効なものにするため平成18年8月から「事後評価の実施・徹底及びNETISの再構築」、「新技術活用の体系化」、「新技術の試行・評価から活用までの道筋の強化」などを取り入れた本格運用が始まっている。これは国土交通省が技術開発のインセンティブを技術活用システムに導入していこうというものであり、多くの新開発技術の登録と事後評価を経て、それらの技術を設計コンサルタントへ情報伝達し、コスト管理の視点に軸足を置き、さらには発注制度システムへも反映しうるものとなるであろう。平成21年度末には本格運用同意技術が2,743件に達し

京都大学名誉教授
国立高松工業高等専門学校 校長

か もん まさ し
嘉 門 雅 史



ており、活用技術は886件である。事後評価技術が109技術と未だ不十分ではあるが、今後一層の促進を図るべく取り組みがなされている。良質な社会基盤を整備していくために、技術者が誇りを持ち、技術が尊重される社会構築への一助となるものと期待される。

建設工事の対象が、今後は新設から維持管理・補修・再生へ変わり、品確法を踏まえた性能規定型に移行していくことから、設計施工一括発注や総合評価制度などの適正な遂行が重要である。地球温暖化防止等の環境保全への貢献として、例えば建築物総合環境評価システム（CASBEE）のように、ライフサイクル（LC）全体によるLCCO₂の評価を加えた、環境効率評価ツールのより広範な展開などが必要である。また、グローバリゼーションの時代において、ソフトと知恵で勝負しうる技術コンサルタントの役割が増大しており、ヨーロッパの国際戦略であるISOを超えた技術開発で国際競争に打ち勝つことが、今世紀のわが国の国際戦略であると考えられる。

第3期科学技術基本計画がスタートし、推進4分野の中に物づくり技術や社会基盤等が挙げられていることから、是非多くの取り組みが進展し、人類の英知を生む技術開発を達成し、活用しなければならない。現在、第4期科学技術基本計画の原案作りに関する検討が始まっていることから、

近隣諸国の社会基盤整備へも拡張した国際協力のシナリオの策定が必要であると考えている。

中国の後漢書（王覇伝）に「疾風に勁草を知る」という言葉がある。激しい風が吹いて初めて強い草を見分けることができるという意味であり、艱難に直面して人の節操の固いこと、意志の強いことがわかるというものである。現在は、世界経済が大恐慌の危機に直面しており、建設業界のみでなく産業界全体が大変厳しい状況に至っている。また、わが国の政治動向、社会動向もすこぶる不安定な状況にある。

本誌を初めて手にされる新人の方も多いと思われるが、これからの建設界における活動に際しても、このような動向が少なくない影響をおよぼすものと推察される。しかしながら、このような社会情勢に惑わされることなく、それぞれに与えられた仕事の場において全力で取り組み、自己の基礎能力の向上、スキルアップに努められることを期待する次第である。朝の来ない夜はない、禍福はあざなえる縄のごとしと言われる。社会の風潮や時代の動向に左右されることなく、強い信念と意志をもって、さらに、高い倫理観に基づいた勇敢な行動をとりうる建設技術者を目指してもらうように願うものである。